



<特別寄稿>

海外のまちづくりの現在

ホーチミンの今に触れて  
〜まちづくりの光と陰〜

佐藤 之彦

今回、ホーチミンを旅したのは4年ぶり2度目のことになる。

ハノイがベトナムの首都として政治の中心地であるのに対し、ホーチミンは、経済の中心地である。



ホーチミンも進展著しいアジア各国の都市同様、独自の手法により少しずつ近代化の道を歩み始めており、この短い期間にも気づいた変化は幾つかあった。

ホーチミンには、この地が「東洋のプチ・パリ」と呼ばれるように、フランス統治下に造られたコロニアル風の統一会堂、市役所、市営劇場、中央郵便局、革命博物館及びノートル・ダム大聖堂などの西洋風建築物が随所に点在しており、道路網もフランス同様、主要な交差点を中心に放射状に配されている。主要な交差点では、信号の代わりに、円形の植樹帯の外周を一定の方向に流すよう交通処理しており、こうした点もフランス統治下の名残を思わせる。

また、ホーチミンには多くの人々が職を求め、集まってきている。そのため、現在このまちは、面積が茨城県の全市街化区域面積と同程度であるにもかかわらず、人口は約3.6倍の520万人にも上る。

この超過密都市での交通についてであるが、公共交通が未発達である上、未だ車が高価な乗り物のため、老若男女を問わず、市民の足は専らバイクということになる。小さな子供であれば2〜3人を同乗させるなど、ファミリーカー代わりに使うのは当たり前。冷房未完備の一般的な住居に暮らす市民にとって、バイクは走らせることにより涼をとったり、移動先で休憩を取るためのベッド代わりともなる非常に便利な道具なのだ。このため、このまちでは商用車やタクシーが肩身の狭い思いで走らざるを得ないほど、非常に高い密度でバイクがひしめき合っている。幹線道路ではほとんど隙間なく道路を埋め尽くし、一



見すると蟻の大群が波のように押し寄せてくるかのような錯覚にもとらわれる。



こうした状況の中であって、交通ルールの緩さは驚きに値する。ベトナムに降り立って最初に気づくことでもあるが、広い通りに多くのバイクが走っていたとしても、徒歩またはバイクが横切るとは日常茶飯事。旅行客も含め、通りを渡りたければ、突っ込んでくるバイクを鋭く睨みつつ、機を見て、一定のスピードで渡ればよい。突っ込んでくるバイクを避けようと思っただけで危険で、バイクに避けさせるようにし向けるのがコツと言える。交通ルールの緩さというより、この暗黙のルールにより秩序が保たれて、接触事故もほとんど皆無というところが、ある意味恐ろしいところではあるのだが、このバイクが車だとしたら、交通量の多さから、この秩序は通用しないことがわかる。何せ、朝夕のみならず、ビジネスタイムですら、『何でこんなに多くの人がこんな時間に移動しているだろう』と思わせるほど交通の途切れる間がないからだ。

ここで、ベトナム人気質に触れておきたい。ベトナム人は寛容である。客商売であるタクシーを除けば、非常に速度を落とした安全運転を心掛けている。歩行者が道路を横切ろうとすれば、多くの車やバイクが神業とも思えるテクニックでスピードを落とさず、紙一重の間隔で避けてくれる。けたたましいクラクションを浴びせられようとも微動だにしない神経はある意味凄い。せかせかしているようでも、そこで暮らす人々は非常に穏和で、交通混雑をストレスに感じていないのだ。雨季のスコール時に道路が河川と化し、カッパをまとった人々が一時的に足を止めたとしても、人々は雨が止めば、何事も無かったかのように着用していたカッパを手際よくたたみ、移動を開始する。もちろん、跳ね上げられた泥水を頭から被せられようとも文句ひとつ言うそぶりもみせない。我々日本人の理解を遙かに超え、達観した僧侶をも想起させる寛容ぶりである。ベトナムでは排気ガスによる公害も深刻化しており、一部の健康被害に敏感な人々は、移動時のマスク着用を欠かさないが、その殆どは若い女性で、多くの人々が公害を公害として意識していない。我々日本人が2〜3日も同じ状況に置かれたら、間違いなく、気管に異常をきたすほどだというのに…。

このように、ベトナム人は過酷な状況を堪え忍ぶ、というよりは受け入れた生活に馴染んでいる。



しかしながら、こうした気質を持ったベトナム人といえども、車という快適な道具を手にする状況になれば、これまでの交通手段であったバイクを乗り捨て、車に乗り換えるであろうことも強く感じた。その原因の一つがインターネットの普及だ。

ホーチミンでは中産階級以上の家庭では子供に高度の教育を施そうと、塾通いさせる家庭が急増しているという。子供の将来の夢で最も多いのもコンピュータプログラマーで、情報が先進国並みに得られ平均賃金の上昇も伴えば、今後のホーチミンの向かう将来像はおおよそ見当がつく。女性も一部の女学生を除き、民族衣装のアオザイを脱ぎ捨て、日本円で50～60万円もする高価な装飾品まで身に纏うことが当たり前になってきている。まちの中心部で、洒落た洋服を身にまとった女性が闊歩している状況を見かけると、ここがホーチミンであることを忘れてしまうほどだ。これほど、欧米文化の浸透は市民の意識を急速に変化させている。一層の欧米化が進み、経済も好転していけば、近い将来、一般の市民が便利な交通手段である車を手にするのは間違いないと確信した。

既に都市交通基盤が不十分なまま車社会に突入した台湾（後に公共交通の地下鉄を整備）やタイ（後に高架鉄道を整備）がそうであるように、このまま車社会が公共交通に先行して進行していくようであれば、深刻な交通混雑が引き起こされ、都市機能が麻痺することは明白なため、このまちでは新たなまちづくりではなく、まちの正しい形を整える意味で、一刻も早く、効率的な公共交通の整備が望まれる。以前より鉄道整備が検討されつつあると聞くと、具体化には至っていないようであり、公共交通の充実・強化は喫緊の課題と感じた。

日が落ちた直後に高層ホテル最上階のレストランから見た景色は、ネオンが市全体に薄く広がっており、まるで漁り火のようであった。この夜景が全てを物語っているように、都市機能を可能な限り集積させ、そこに公共交通を整備しなければ、本当の意味での近代化も危ういのではないかと感じた。

ここで、生活や文化の変化にも触れておきたい。これまでの旅行でも一貫して持ち続けているテーマに「地元のお古からの生活や文化に触れる」ことがある。日本も他のアジアの国々も歩んできたことであるので、驚くべきことではないのだが、生活様式の変化も気にかかった点である。前回の旅行時に連日足繁く通ったおいしい地元料理を出してくれる古びた食堂はこの短期間の間に日本と何ら変わらないお洒落な装いのカフェに



様変わりし、前回行ったメコンデルタへも足を運んだが、前回日本のお菓子を与えた代わりに沢山の草編みの昆虫の造花物をくれた何のくたくもない地元の子供達とは、今回ついに会えずじまい。メコンデルタの旅程で、衣服を着用し立ち姿のまま汲み水で髪を洗う女性や、天井の無い腰ほどの高さの小さな箱の中に腰を下ろして用を足す女性を見かけ、一部で今と昔が混在している混沌も残されていることが唯一嬉しかったし、少しばかり救われたような気もしたが、近場の観光地までもが俗化しつつあることを物語っており、言いようのない寂しさも覚えた。

ホーチミンのまちでは、一見すると街並みは統一感がなく、人やバイクがあらゆるところでごった返しているように見えるが、人々は暗黙のルールの下互いを尊重し合って生活を営んでいることにも気づく。

ベトナム人の平均月給が日本円で5千円、一方でまちの中心部の地価は暴騰もあり、坪単価で120万円（参考までにハノイでは630万円）にもなるという。貧富の差が今後どのような陰をこのまちに落とすかはここでは触れないが、しつこいバイクタクシーの勧誘や商魂たくましい路上の物売り、間口の狭い店舗に所狭しと置かれた商品を、観光客の値切り交渉にあいつつも巧みな話術によりかわす小売商人など、その生き様は馬鹿にすることはできない。なぜなら、そこには我々日本人が忘れてきた、生きるという本能（＝活力）がみなぎっているからだ。

ホーチミン市の未来は、こうしたベトナム人氣質に望みを託すほかないのだろう。まちづくりの成否は地域、いや誤解を恐れず言うならば、そこで生活を営む人々の力にかかっていると断言したい。1人勝ちではなく、ある程度の人々が一定の方向を向き、一体感を持って強くまちづくりに臨もうとしなければ、バックアップする官側の支援も空しい結果に終わる。ホーチミンでは居住環境の整備・改善が追いつかず、政府も外資系の民間に下駄を預けている状況と聞く。強く望み・行動に移そうとすれば、官ばかりでなく、民をも動かし、とてつもなく大きな力となる。

今回の旅で、ホーチミンのまちに住む人々の、不器用でも、狭いスペースで互いに協力し合いながら生活している姿を目の当たりにすることができたが、一方で、今の日本人が人として当たり前の生きる（＝生きる）という本能を著しく弱めてきてしまった現実を突きつけられた思いがし、もどかしさも覚えた。“たゆまぬ努力”と“貪欲なまでに生きようとする”心意気を持っていた日本人が今最も欠けている部分を気づかせてくれた意味で、今回の旅は非常に貴重なものとなった。